

記念物としての博物館

小林達雄¹⁾

The Museum for a monument

Tatsuo KOBAYASHI¹⁾

1. はじめに

日本の博物館や美術館は少しも面白くない。欧米のそれと比較しながら、岩渕潤子は『美術館の誕生』（中公新書）の中で再三、再四にわたって述べている。いささか穏やかさに欠ける言ではないか。しかし、私もまた同じ言葉を幾度となく吐いてきたことを認めないわけにはいかない。このおもしろさは決して、笑いをとる、とらないの問題では勿論ないのだが、ことは博物館、美術館の本位にかかわって重大である。

その一方で、公・私の博物館、美術館（以下、博物館）は続々と新設され続けており、つまりおもしろくないものが増えて巷にあふれ返る一本道をただひたすら走ることになる。そして世間では「よほどの用事でもない限り、出かけて行かない」（前掲書）建物だけが大きな顔して平然と居座るというわけである。莫大な経費を投入して、なお無用の長物を実現するというのでは、なかなか合点できない話である。

問題は、博物館の展示そのものだけに由来するのではない。実際、内容的には真面目で、充実したものも少なくないのである。つまり、このことは、ひとり内容の改善によって解決できることではないから、かえって問題の所在がはっきりしないのである。

見るあるいは見せるという、博物館にとって見える内容に問題があるのであれば、これまでの努力の延長線上で解決が期待できたはずである。けれども、実際は見える次元を超えた、見えないところにこそ本位は隠れているのである。これまでの博物館に対する努力や誠意が足りなかったせいではない。むしろ、たしかに、博物館の建設地、面積、展示内容、人事構成、運営などについては、良く検討されてきている。それ故、他館に比べて桁はずれに劣ることもなく、さりとて突出しすぎることもなく、互いに右に習って同じ轍を踏みながら安心してきているのだ。見える部分で遜色なければなんの不満もない。たとえ差が多少あろうとも、それは投入された経費の多寡に由来する差であって、それ以外のなにものでもない。どうも、現存する博物館の比較検討を通じてただ改善を重ねて行くことで解決されることではないらしいのである。

問題は、博物館に対する哲学である。取り組みの姿勢であり、見えないものについて考えることなのである。

2. 見せてやる、教えてやる博物館

明治における日本の博物館は、帝室博物館によって拓かれた。つまり、博物館は、天皇に象徴される国家が所有する宝物を人民に展覧するものであり、いわばオカミの御慈悲によって有難く拝観させていただくということなのだ。この「見せてやる×見せていただく」関係が、その後の今日にいたる博物館の在り方に多大なる影を落とした。展示物は、一般の観覧者に知的刺激を与え、楽しんでもらうというよりも、国家の威信を誇示するための、いわゆる威信財としての意味が強かった。そこから権威的、高圧的あるいは不親切で、よそよそしい雰囲気が生まれてきたのは蓋し当然といわねばならない。ここではなれなれしさ、おもしろさは、かえって博物館から排除されるべき要素となる。

そしてたとえば今日、博物館で「禁写真撮影」の札が、しつこく掲げられている遠因の一つともなっていることを知らねばならない。よりよい博物館、みんなの博物館を標榜しながら、未だに撮影を禁止する心はいったいどのように整合するのであろう。時には展示の余韻に浸りながら遊ばせている眼のなかに否応なしに飛びこんでくる禁止札の、いかにも不粹の、場違いの命令は、撤廃をこそ考えるべきである。いろいろ理屈はあるらしいが、実のところ「見せてやる×見せていただく」関係から出発した当初のオカミの御意向をそのまま踏襲しているにすぎないのだ。そして理屈を今様にこじつけて平然としている。見る側も、博物館とはそういうものだと思込まされてしまって、いささかの疑問も不満も抱く余裕さえ奪い取られているのである。かつてアメリカ合衆国の博物館を巡りながら、いちいち写真撮影の許可を願い出て、かえって不審がられた経験を思い出す。あのとき、ようやく博物館あるいは展示と写真撮影ということについて改めて考えさせられたのであった。初めての出会いに興奮のあまり、あるいはメモ代わりに、ときにはささやかな思い出のために写真を撮るのが禁じられる理由など、どこにもあろうはずがない。もともと我らがオカミは博物館に限らず「べからず令」が体質的に好きなのだ。それこそ哲学抜きに「べからず令」をただ連発することで存在を主張しているかのように見える。誤解されると困るのだが、現在博物館の関係者を非難しようというのではない。いわば関係者に限らず自分を含めて長い歴史の流れに乗せられた不幸を改めて慨嘆せざるを得ないというわけである。

博物館は、権威を墜としてはならない。この鉄則は、依然としていささかの揺るぎもせずに継承されている。まず入館料を徴収する。ここで無料で入ろうとするような不心得者を排除しようというのでもあろうか。現実には、受付係を配置する人件費に見合う程でもない入館料の徴収にそれ程のメリットがあるとは思えない。そうした博物館でも、ただ多くの博物館仲間が実施しているということだけで、右に習いして自ら問直そうとはしない。博物館法で、入館料はとるべきでないと呼んでいる高邁な趣旨とその哲学を一顧だにしないとはどうしたことであろう。ここにも「見せてやろう×見せていただく」関係が見事に生きて磐石である。

太平洋戦争後は我が国の民主化が大いに進んだ。社会教育の普及も目覚ましいものである。こうして図書館とともに博物館建設も社会教育、行政サービスの一環として推進された。博物館の看板から帝室の名もおろされ、さらに主権在民の新生博物館が各地に誕生した。そして今日みるごとき博物館が出揃った。しかし、博物館の性格そのものにはあまり変化はなく、依然として旧来の博物館思想が息づいている。つまり、一般市民のために計画され、実現された博物館とは云條、オカミの御慈悲による啓蒙機関であり、「見せてやる」が、「教えてやる」へと衣替えしたにすぎなかったのである。この「教えてやる」思想は、国定教科書や当用漢字制限とか仮名遣いの国語審議会などにみる、世間を支配しているあの行政的規制の一環とみることができる。例によって根は深いのであり、博物館の問題といえども博物館自体のみで完結したり、解決できるものではないことがわかる。とは言うものの、

博物館を取り巻く状況に委ねて解決を待っているのではない。

行政による積極的な啓蒙活動は大切なことであり、さらに推進されなければならない。博物館はその重要な部分を担っていることは確かである。だからといって、どんな博物館でも許されるというわけではない。とくに現在の博物館には押し付けがましさが、やや過剰さみに見える。たとえそれが善意に発しようとして、相手に正しく伝わるとは限らないのであり、つねにそれなりの工夫、手続きが必要とされる。良かれと思う親心が、かえって子供の心の離反を招きかねないことを知らねばならない。

博物館をもつことは、文句なしにいいことだ。だからといって行政が勝手に立案し、内容のシナリオを決めて作れば良いというものではない。与えられる側が何を望んでいるのか、斟酌せずに一方的に押しつけてはいないか。それは公立博物館であっても、決して公的博物館ではない。真の公的とは、行政側が一方的に作る官立ではなく、さりとて民間だけが作る私立ではなく、「行政＝官」と「民間＝私」の共同事業となるべきである。それが公立博物館である。もともと行政側、官は民を軽蔑とはいわないまでも啓蒙すべき対象とみがちなのである。しかし、今や民間の力も向上し、さらに多様化しており、少数の担当者の域を超えた世界が形成されているのではないか。この今金町の博物館建設において地元代表者によって建設準備委員会が構成されているのは、その意味で新しい可能性が期待される。実際、委員会では行政側からの一方的な説明ではなく、また地元からのなりふりかまわぬ一方的な要求でもなく、厳しい対立を止揚しようとする議論がある。ここに町外の委員がさらに加わって意見が交換され、さまざまな角度からの検討が加えられる。まさに、官民の協業による博物館としての一步が踏み出されようとしているのであり、ささやかながらも新しい博物館像がその形を現わしつつある。

3. 記念物としての博物館

博物館は官と民との共同の産物でなければならない。そのための合意が前提となる。

ここに到って、縄文時代の記念物が想起される。あのストーンサークル、環状盛土遺構、巨木柱列、環状土籬^{どり}などである。形態は、それぞれに異なるが、いずれも規模が大きいところに第一の特色があり、個人はもとより家族や小さなグループを超えた、地域のコミュニティー全体にかかわる公共的施設である。極めて目立つ存在である。また、その構築には莫大な年月がかけられていて、100年、200年はおろか、数百年と見積もられる例がある。だから計画から完成までには、相当の人手が投入されている。つまり、縄文記念物は、一部のグループの思いつきで、またたくまに出来上がるというものではないというところにこそ真骨頂がある。その地域の全員が合意の上で、滅私奉公の心があって、ようやく可能となる。それだけの合意は、彼等の世界観に裏打ちされてはじめて現実のものなる。どうしても必要だという意欲が等しく全員に共有されるのには、現実あるいは日常的な損得を抜きにした、まさに世界観に基づく合意以外にはありえない。世界観による合意こそが、その時代、文化、技術の枠を大幅に超えた規模の記念物の構築を可能たらしめたのである。古今東西にみる同様な記念物も例外ではない。エジプトのピラミッド、マヤの神殿、ジャワのボロブドゥール、カンボジアのアンコールワット、中国の万里長城など、いずれも自らの水準からは到底想像できないほどの、とてつもない規模の実現に成功している。日常的な寝起きの家屋をはるかに凌駕した記念物は、それが日常性を超えて、ひたすら世界観を表現しようとした全員の心の結晶なのだ。力をあわせて作り続けながら、同じ世界観を共有する安心を互いに確認し、連帯感を高める作用が働いた。ここでは長期間かかることはマイナスではなく、むしろプラスの効果をもたらす要素となるのだ。そして次第に意図した記念物の姿かたちが現われ、目立った存在にふくれ上がってゆく過程に満足を感じてゆく。そこにこそ安

心がある。いわば彼等が良しとした世界観をモノ化しながら、はっきりと心の拠りどころと定め、迷いを拭い去ってゆく。だからこそ、記念物は常に形を大きくし、整えるだけでなく、そこにさまざまな思いをこめ重ねて、そして祈り、願をかける場となる。土偶や石棒や石剣、石刀あるいは土版・石版その他のまわりの道具が記念物から沢山発見される理由がここにある。記念物は多目的催事場、祭祀場であったとともに、全員の連帯を確認する場でもあったのである。

縄文時代以降にも、そうした機能を有する記念物をもっていた。形は変わり、内容も多少とも変容しながらも、たしかに縄文記念物に代わるべき記念物をそれぞれに保有していた。古墳時代の前方後円墳もまた大規模で、長年月をかけ、莫大な人力が投入されたものである。これは支配者が一般農民を強制的に使役して築造した、あくまで個人的な墓であって、自らの権威を誇示しようとしたものと解釈されてきた。しかし、それはあまりに教條的な唯物史観といわねばならない。むしろ、あれだけの規模を実現し得たのは、強制的な労働のみによるものではなく、一般農民の側にも合意すべき世界観が共有されていたからであろう。おそらく相当の自発性があったればこそ、長年月に亘る勤労奉仕が可能となったのだ。さらに古代以降の寺院建立もまた一部の僧侶や権力者が一方的に発案して労働に駆り立てたものではなく、これを是とする一般庶民の合意があったからである。ときには建立のために黒髪をすらし供出して、かえって安心を得ようとしたのである。近世の城柳でさえ、次第にクニグニのシンボルとしての意味を加えて地方毎の記念物的性格を備えるに到った。

翻って、そうした記念物を今日の我々も持っているであろうか。仲間の皆んなと思いを同じくして、納得づくで心の拠りどころとするような、そんな何か一つをもっているであろうか。答えは、どうしても否定的にならざるを得ない。つい先ごろまで、神社鎮守の森が記念物的な存在として心を通わせることが出来ていた。それは確かなことではあるが、開発の波は巨樹を伐採し、社叢のかたちを奪った。森は駐車場に生まれ変わって日常生活上では便利になったりもしたが、しかし記念物としての機能は全く消えた。南方熊楠の鎮守の森の保護運動は、単なる生態学的な自然保護運動ではなかったのである。心の拠りどころとなる記念物の保護の意味合いも忘れてはならない。

4. おわりに

公共的施設は、それぞれの地域にいろいろある。都道府県の庁舎をはじめ、市町村役場や図書館、体育館、公民館、文化センター、そして博物館、美術館である。さらに公園や学校などである。これらは、いわゆる大規模な構築物という点からすれば、十分に記念物の資格の一つを備えている。しかし、決定的に欠けているところがある。つまり、そうした公共的施設のいずれもが行政側の思惑、都合で実現されたものであり、いわゆる民意はほとんど反映されることがない。たしかに、庁舎などの公共的施設はそれぞれに相応の機能を發揮しているが、それ以上のものではない。必要な面積が経費との兼合いのなかで確保されれば充分なのである。作る過程に於いても参加するよろこびも、次第に完成に近づくかたちを眺めるよろこびも共有されることなく、行政と工事の請負者など極一部が関係するだけなのである。その規模図体と、それを実現するのに要する金額や動員数は記念物に似ていて、やはり決定的に不足しているのが総員の合意という点である。合意こそが記念物の前提であり、シンボルへの源である。

公共的施設の中には、記念物的性格になじみ易いものとそうでないものがある。中でも博物館は記念物たる資格を備え得る最右翼ではないかと考える。それにも拘わらず、今日の博物館に欠けているのが、その記念物性である。このことは、しばしば博物館を上野動物園の人寄せパンダに代わる観光資源と位置付けるところに如実に現われている。都道府県立から市町村立の博物館に到るまで競っ

て域外からの観光客を目当てにして、少しも地元民を顧みようとしないのだ。まずその地に生まれ育って生活する者の需要に応えようとしない姿勢は後向きと言わざるを得ない。入館料だけにこだわるわけではないが、それだけの徴収には地元民への配慮がないと言わざるを得ない。楽しむ者、利用する者、学ぶ者がそれなりの代償を支払うべきであるという考え方もあり、なにがなんでも受易者負担を排除すべきであるというのでは勿論ない。しかし、そうした博物館に対する考え方が展示にも表われて、傷口を深くしていることを知らねばならない。

博物館を域外からの人々を対象に考えるとき、それは展示の内容をも方向づける。つまり、地元民が幾度でも足を運んで見学し、楽しみ、参加する内容にはならないのだ。一見の客を驚かす、ウケ狙いの展示を目指したものは、短期決戦のイベント的となり、恒久性というよりも一回性の内容となってしまう。つまりは内容は深味に欠け、薄っぺらとなる。一回見れば気が済む程度の内容であって、二度三度と見る必要のないものとなる。一度見て回れば、用済みとなる博物館が地元にあっても、地元民にはなんの益するところとはならず、記念物としての価値を失う。折角設けた博物館は地元民から見放されてただ地元の風雪のなかに寂しく立つだけでいいのであろうか。しかも同じ発想で次々新設される市町村立の最新の博物館に客筋を奪われて閑古鳥が鳴くようになる。次第に維持管理費のみがかさんで来て自治体の財政を圧迫し、手放すことのできないお荷物を抱えて嘆くはめになる。そのとき改めて地元民のためにもならないことを身に染みて感ずるのだ。

博物館はそうであってはならない。博物館こそその地域毎の記念物たる潜在的能力を秘めている。このところに思いをいたして、そして博物館は作られねばならない。ではどう作るのか。どんな内容にすべきか。問題はこれからにかかっている。その問題の解決のためにも、どうしても博物館の今日を正しく認識する必要があり、本稿はその前提作業の概観を試みたものである。その具体的な展望は別の機会に譲る。